
全世界ハートブレイク

すーじー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全世界ハートブレイク

【Nコード】

N7010Y

【作者名】

すーじー

【あらすじ】

魔女シリーズ。重複投稿。

(前書き)

昔のやじ。

ある日、世界が滅んだ。魔女の作った爆弾が、誤作動を起こしてしまったのだ。魔女は生き残った人間に殺されてしまったけど、魔女を私刑にした人々もまた、爆弾から放出された人間にしか効きめのない魔法の毒で次々と死んでいった。解毒剤は存在したかもしれないけれど、魔女がいなくなった今ではわからないし、作ることもできない。魔法の毒は、ふつうの人間には到底解析できないものだったのだ。なすすべもなく滅亡の一途を辿る人類は、ついにはぼくと親友の女の子だけとなってしまった。さて、何故ぼくたちだけが生き残っているかという疑問点については、これから説明する。

女の子は、実はロボット人間だ。

彼女のお母さんはふつうの人間だけど、お父さんの方はロボットなのだ。だから彼女は半分だけ、ロボットだ。身体は強くないけれど、頭は抜群に良いし、要領がいい。大抵の人が持ち合わせている『驕り』や『悔やみ』といった成分がないので、彼女はとてもさばさばしていて、よくできた人だと思う。そのことについての話になると、彼女は決まって、「それは心がないからよ」と笑う。

そんなことはない、ぼくは思っている。だって、心がなければ笑うことなんかできない。彼女は謙虚なだけであって、心はちゃんとおあるはずだ。それは、親友であるぼくが一番わかっている。

話は逸れたけど、彼女はロボット人間だから、幸いにも魔女の毒から逃れられたというわけだ。ではどうして生身の人間であるぼくが助かっているのかというと、彼女だけに内蔵されている、原子レベルで食べ物を再構築する機能を利用させてもらっているからだ。毒に侵食された部分だけを的確に取捨することによって、ぼくは魔女の毒を摂取することを免れてきた。でもやっぱり、まったくこれっぽっちも毒の影響を受けずに生きていくというのは、不可能な相

談だ。彼女だって万能ではないのだから、大気中の毒素までは浄化できない。魔女の爆弾が爆発した日から次第に　　僕の身体は消耗していった。

かと言つて、ぼくが寝込んでしまうと困ったことになってしまう。と言つのも、前に述べたように彼女は体が弱い。力仕事のほとんど全ては、ぼくが引き受けていたのだ。そしてこの状況において、ぼくの仕事というのは山ほどにある。ここでぼくが休んで彼女になにもかもを押しつけてしまつては、今度は彼女が倒れるだろう。それを承知の上で、彼女はぼくに、「ちよつと寝ていた方がいいよ」と提案してくる。

本当に、ぼくの身を案じてくれているのだ。それだけに、ぼくは自分の務めを怠るわけにはいかなかった。彼女に負担をかけたくない、その一心で。

ぼくは何も言わなかったし、だから彼女も何も言わなかったいや、言えなかったのだろう。ぼくの肉体はもうかなり、ダメになつてきていることを。気力だけで腕を働かせ、使命感のみで足を運び、ちよつとでも怠けようものならば、自身を厳しく叱咤した。初めのうちは、やる気さえあればなんとかなる、と楽観的観測をしていたけれど、ガタがきた身体はおこがましくも、ぼくの心まで道連れにと蝕んでいった。騙し騙しに生身を酷使してきたツケがまわつてきたのだ。心が荒んでいくのがわかった。ちよつとしたミスでイライラして、何の罪もない彼女に当たるようになってしまった。すると自己嫌悪におちいり、そこに労働の疲労が重なると、心のヒビはさらに深くなる　　悪循環だった。

野生において、心というものは必要ないんだと気づかされた。意志があればたしかに身体を動かすことはできるけど、少し傷が付いただけで支障を来し、足枷となつてしまう。その点においては、人間と比べて獣は遙かに優れている。人間は一体いつ理性を得て野生から離れたのだろう。あるいはその逆、野生からの乖離が理性を産

んだのか。卵か、鶏だ。

もしぼくがキリスト教徒なら、イヴを憎んだに相違ない。イヴが、あの女がヘビにたぶらかされて知恵の実をかじったばかりに、ぼくらは楽園から放逐されてこんなお荷物を抱えるハメになったのだから。

心なんてなければよかったのに。ついにぼくが過労で倒れる直前、心からそう思った。

ぼくの摩耗の具合はひどいものだった。総身は言うとおりに機能せず、彼女の助けがなければ何をすることも困難だった。ひどく無様だ。

「世話をかけて済まないね」と頭を下げると、彼女は首を振って、「平気だから」と微笑む。

自分の情けなさが、身に染みだ。

ぼくが横になっっている間は当然の事ながら、ぼくの仕事は彼女にまわってくることになる。繰り返すが、彼女は肉体的に強くなり、文明が崩壊したこの世界で二人を養うのは彼女にとって苦痛を極めたに違いない。だけど彼女が弱音を吐くことはなかった。時折辛そうな表情を見せることもあるけれど、ぼくが見ているのを知るとすぐさまに笑顔で打ち消した。

彼女はよく、自分には心が欠けていると言っていたが、そんなことはない。心がなければ、苦痛を感じたり、ぼくに気を遣うなんてことはできない。本当に苦勞をかけている。早く治さなければ、と思った。

ぼくの意気込みとは裏腹に、病状は悪化する一方だった。ぼくは医学には明るくないから、病理はわからない。彼女に問うても、申し訳なさそうに謝るだけだ。わからないことは悪いことではないのだから、彼女に非はないのに。謝らせているような気がして、腹の奥が苦くなった。

衰弱は、時間が経つに連れて進んでいった。身一つ起こすのにさ

え、かなりの労力が要求されるほどにまで至った。ぼくは頭の片隅では、本能的に感じ取っていた。ぼくは、終わってしまうのだろうということを。もう手遅れで、何を為そうと骨折り損なのだろうと最後に原始的な生活をしてみて、そんな感覚が鋭くなったのだ。

心があつた所為だ、と思った。彼女に負荷をかけたくない、心配させたくない。なんだかんだと言つては結局、心のどこかでは彼女をよすがとしていたのだ。その心の薄い部分から、なしくずしにやられていった。心なんて何の役にも立たない。装飾と同じだ。自分分は人間であるという記章に他ならない。本質の皮を被つた虚飾だ。なんて諧謔だ、片腹痛い。こんな下らないもの、捨てられるものならば、今すぐにでも捨てたい。だけど神はぼくを無視した。

「こんなぼくに付き合ってくれて……、ありがとう」息も絶え絶えになる頃になつて、おもむろに、ぼくはそう言った。最期に、死んでしまう前に、どうしても伝えたかった言葉だ。

案の定、彼女はかぶりを振って、

「いいの。これでようやくあなたの心が手にはいるのだから。お互い様よ」「いつもと変わらない笑みを広げて、そう告げた。

「え　？」一瞬、理解できなかつた。いくら待つても、氷解することはなかつた。彼女が話しはじめるまで、ぼくの脳は停止していた。

「簡単なこと。私には力がないから、あなたを毒で徐々に弱めていくしかなかった。解毒したというのは、嘘なの」

頭の中が、漂白された。まさか、彼女が。どうして、こんなことを

「心が、欲しかったからよ」ただ、それだけの理由で。

ぼくの中の白色に、染みが現れた。墨汁を一滴落としたような、小さく黒い染み。やがて、感染するように黒色はじわりじわりと大きくなつて、白を犯し尽くしてしまった。

「最後に、言いたいことはないかしら？　あなたが死ぬ前に、心を

取らなくてはならないの。作業には、時間がかかるから」柔らかな表情を崩すことなく、彼女はぼくに尋ねた。今更になつて、彼女の笑みは、機能なのだということを発見した。

「それじゃあ一つ……ブリキの木こりが、オズにもらつたものを知っているかい？」

「知っているわ」おがくずのつまつた、絹の袋。

「そう……。そんなに欲しいのなら、こんなもの、いくらでもくれてやるよ」

彼女に心はある。死ぬ直前に悟つたことだ。それは『驕り』や『悔やみ』よりもなお人間らしく本能的な、『殺意』と『欲望』という名の心だ。撞着していて、それ故に肉質が感じられる。彼女にこそ、心は相應しい。きつとどんな飾り付けよりも、よく似合う。ならばぼくは喜んで、彼女に理性を差しだそう。心なんていくらでもくれてやる。

ぼくはまもなく、心を失つて死ぬ。世界には彼女一人だけが存在することになる。だけど寂しがることはないだろう。そんな心は、彼女は持っていないからだ。それに。

彼女はまもなく、自殺するのだ。彼女への憎悪に満ちた、ぼくの心を得て。『自己嫌悪』と、『殺意』と、『欲望』とにまみれて、汚らしく死ぬ。

ざまあみろ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7010y/>

全世界ハートブレイク

2011年11月21日03時21分発行